

## 第2回 住民がつくるおしゃれなまち研究会 議事概要

日 時：2017年12月22日（金）15:00～17:00

場 所：戸田市上戸田地域交流センター 会議室

出席者：【委員】卯月盛夫 座長（早稲田大学）、岡田智秀 委員（日本大学）、福井恒明 委員（法政大学）、牧瀬稔 委員（関東学院大学）、梶山浩 委員（戸田市）、石川義憲 委員（日本都市センター）

【講演者】伊藤香織 東京理科大学理工学部 建築学科 教授

【戸田市】神保国男 戸田市長、関係課所属長、戸田市 PT

【事務局】川上担当課長、長谷川副主幹（戸田市）

池田副室長、高野研究員、瀧澤研究員、千葉研究員（日本都市センター）

### 議事要旨

- ・伊藤教授によるシビックプライドに関する報告
- ・戸田市内視察に関する議論

#### 1 伊藤教授によるシビックプライドに関する報告

##### (1) シビックプライドとは

- ・シビックプライドとは「都市に対する市民の誇り」である。しかし単なるまち自慢や郷土愛ではなく、「ここをよりよい場所にするために自分自身がかかわっている」という、当事者意識に基づく自負心である。
- ・シビックプライドがあれば、自分からまちに対して何か行動を起こす気持ちが生まれる。その気持ちが、まちをつくっていくという動機やアイデアとなる。
- ・自分の行動によってまちが変化し改善する。それが恩恵として自分に戻ってくる。そして、改善して良かったという気持ちや自分が行動したという誇りにもなる。
- ・19世紀のイギリス、ヴィクトリア朝時代に商工業によって多くの都市が勃興した。こういった都市において、シビックプライドが都市の規範になったと言われている。
- ・19世紀に都市の主演として台頭してきた市民階級（この頃は中産階級であった）が、富と進歩的な考え方を背景に、新たな都市づくりを支えていくことが自分たちの社会的ミッションであり、美德であると考えていたからである。
- ・特に彼らのシビックプライドの象徴となったのが、公共建築、文化施設、公園といった都市の新しい空間であった。
- ・コミュニティとシビックプライドの関係を考えると、コミュニティは人と人とのつながりである。一方、シビックプライドは、人と人だけがつながっているのではなく、まちの要素を介して人同士がつながっていると解釈している。
- ・シビックプライドで重要になるのは、まず、人とまちとの関係を築いていくことである。

##### (2) シビックプライドに関するキーワードと事例紹介

【まちを知る…イギリスロンドン「オープンハウス・ロンドン」】

- ・毎年9月の第3週末にロンドン中の700以上の建築物が無料で一般公開されるイベントである。有名な建築物だけでなく、住宅でも公開しているところがある。
- ・建築は、まちの文化であり、アイデンティティであり、パーソナリティの象徴であるため、それを知ることは、まちの魅力を知ることと等しいという考えから始められた。
- ・建築物は、実際に自分が空間の中に入って、体験しながら学ぶことができる。そして建築家やオーナーと対話し、その知識を共有する。そして理解を育むことで、市民がよりよくつくられた建築環境の支援者、唱道者になることを促す効果が生まれる。

【まちを使う…イギリストッドモーデン「インクレディブル・エディブル・トッドモーデン」】

- ・まち中にハーブや野菜、果物を植え、誰でも採って食べていいというNPO活動である。
- ・駅のホーム、歩道、警察署など様々な場所にプランターや菜園があり、色々な主体が管理している。この活動を実施することや採取することに対して、どこかに許可を得るといったことはなく、現場レベルで対応している。
- ・「食べられる」というのは重要な要素である。今まで見落としていたまちの端々に興味を持つことができるためである。

【まちの文化を体現する…静岡県三島市「街中がせせらぎ事業」】

- ・80年代のイギリスで始まったグランドワークが基になっている。住民と企業と行政がパートナーシップを組みながら、地域環境を改善していくという活動である。
- ・三島市は、せせらぎの環境を浄化していくという試みである。行政がハード事業、商工会議所はソフト事業、NPOは身近な環境改善、市民ボランティアが里親として清掃作業やガイド、一般市民は緑化を行うといった役割分担をしており、それぞれの立場で参加しながら活動を展開している。

【まちに参加する…富山県富山市「富山ライトレール」】

- ・富山市は、コンパクトシティをめざし2006年に日本初の本格的LRT「富山ライトレール」を導入した。7色の車両や場所ごとに統一しつつモチーフを変えた電停など、LRTに関してのトータルデザインを行っており、市民も愛着を持っている。
- ・ラッピング電車では、地元の高校生にメッセージを書いてもらうなど、市民が利用のみに終始するのではなく、「自分に関係がある」と思える仕掛けづくりを行っている。

【まちに関与する…ドイツライプツィヒ「空き地活用」】

- ・東西ドイツ統一後に人口が流出したライプツィヒは、地区によっては空き家率が70%以上になっており、空き地もゴミ溜めと化していた。
- ・そこで、近隣住民は自らの手で空き地を「庭」として整備し、自主運営を始めた。そのことをきっかけに、住環境が徐々に改善し、若いファミリーに人気の地区となり始めた。
- ・行政も、活動したい市民には土地を持っている人を紹介するなど、空き地活用の仕組みづくりを構築している。

【まちで自己実現する…新潟県新潟市「上古町商店街」】

- ・新潟市上古町商店街は、20年ほど前はシャッター商店街であった。この商店街の古い建物の雰囲気を入り込んだクリエイターが仲間たちと店を開き、フリースペースを活用したイベントを催

すなど、まちを拠点に活動した。

- ・地域商品や商店街グッズなどを開発し、情報発信も行った。そうしたことで商店街での出店が増え、上古町商店街はシャッター商店街ではなく、昔ながらの商店と若者の店の混在する商店街になった。
- ・まちと私という1対1の関係ではなく、みんなで共有する展開や見せ方をすることが重要である。同じ目的を持った人だけではなく、それ以外の人も気付くような共有の仕方が鍵になる。

## 2 戸田市とシビックプライド

- ・新しいことを始めようとしているやる気のある人、やろうとしている人を、上手くまちと一緒にやろうと言える環境づくりが重要ではないか。
- ・戸田市内を視察して、彩湖・道満グリーンパークなど自由度が高いという印象を受けた。やりたいことをやりたいようにできる、やろうと思えば色々な関わり方ができるのではないか。自由度が高いこと、さらにそれが美しい生活シーンを生むであろうことが戸田市の魅力や可能性であると考えている。
- ・戸田市のまちづくりの資源として、自然景観は素晴らしい。また、戸田市に多く住むファミリー層は、確実に都市と関わりたいと思っている世代である。こういった世代は、まちづくりの資源である。
- ・ヨーロッパと日本を比較すると、日本の公共建築や公共空間、ランドスケープは確実に質が低い。そのため、そこに市民が関わろうとする余裕がない。
- ・公共空間として代表されるのが駅前広場。こういった市街化された都市空間には、何か特別な工夫や仕掛けが必要になるだろう。
- ・まちを使いこなす市民を育てることが重要である。都市空間の設計の仕方によって、自然発生的に市民が活動したり提案したりすることは可能ではないか。

## 3 今後の予定

- ・第3回研究会は、2018年1月22日に開催予定である。岡田委員に問題提起をしていただき、意見交換を行う。
- ・第3回研究会の頃に、戸田市民向けアンケートを実施する予定である。年度内に回収したアンケートを分析し、研究会にて報告する。

(文責：日本都市センター)